

令和三年度
高等学校入学者選抜学力検査問題

第一部

国語

注意

- 1 問題は、**一** から **四** まであり、7ページまで印刷してあります。
- 2 答えは、すべて別紙の解答用紙に記入し、解答用紙だけ提出しなさい。
- 3 問いのうち、「……選びなさい。」と示されているものについては、問いで指示されている記号で答えなさい。
- 4 問いのうち、字数が指示されているものについては、句読点や符号も字数に含めて答えなさい。

一

次の問いに答えなさい。

問一 (1)と(4)の——線部の読みを書きなさい。

- (1) 家庭にガスを供給する。
- (2) 穀物を貯蔵する。
- (3) 雪が降って道幅が狭まる。
- (4) 応急処置を施す。

問二 (1)と(4)の——線部を漢字で書きなさい。

- (1) 時計のでんちを交換する。
- (2) 父のきょうりは青森県だ。
- (3) 柱時計が時をきざむ。
- (4) 手芸店にきぬいとを買いに行く。

問三 次は、郵便局の受付の揭示文です。この揭示文が、待つことを求める文となるように、
 [] に当てはまる表現を、「お……」という形の尊敬語を用いて書きなさい。

順番にお呼びしますので、番号札を取って [] 。

問四 楷書で書かれた次の熟語を見て、(1)、(2)に答えなさい。

特技

- (1) 「特」の()で囲んだ部分は何画目か書きなさい。
- (2) 「技」と同じ部首が使われている漢字を、行書で書かれた次のア～クから選びなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ア | 枝 | イ | 微 | ウ | 誓 | エ | 域 | オ | 孫 |
| カ | 独 | キ | 扱 | ク | 悠 | | | | |

問五 次の文章を読んで、(1)、(2)に答えなさい。

草食動物のウシは食事の時間が長い。というのも、ウシは草から栄養を取るのではなく、ウシの胃で暮らす微生物が草を分解してできたものがウシの栄養の主体だからだ。つまり、ウシがせっせと食べる草は、胃に暮らす微生物のエサとなる。

ウシが食べる草は、微生物にとってもそのままでは分解しにくい。そこで、ウシは飲み込んだ草を口に戻し、再びかみくだく「反芻^{はんすう}」を行う。この繰り返しには長い時間がかかる。そこでウシは、食べる時間と眠る時間の両立を図った。食べながらうとうと眠り、眠っている間も食べ続ける。さらには、眠りながら反芻も行える。

うとうと眠りながらも、口をもごもご動かし続ける能力はウシにとって必然だったのだろう。逆に言うと、深く眠ってしまうと、反芻能力も落ちてしまう。だから、消化を進め栄養を得るためにも、深く眠るわけにはいかないのだ。このうとうと状態が続く割合は、エサによって変わる。消化しにくい干草を食べているときは一日の30%がうとうと状態だが、消化しやすい固形飼料を食べていると一日のわずか5%がうとうと状態になるに過ぎない。消化に費やすエネルギーが減り、深く眠れる時間が増えるため、ウシを太らせるには適している。まさに「寝る子は育つ」というわけだ。

関口雄祐（「眠れる美しい生き物」による）

(1) 線「ウシは食事の時間が長い」とありますが、筆者がこのように述べる理由を次のようにまとめるとき、①、②に当てはまる表現を、それぞれ文中から十五字以上、二十字以内で書き抜きなさい。

ウシは、①から栄養を取っており、微生物が分解しやすくするために、②ことを長い時間をかけて繰り返し反芻が必要だから。

(2) ウシが固形飼料を食べたときの眠りについて、次のようにまとめるとき、に当てはまる表現を、文中から五字以上、十字以内で書き抜きなさい。

干草と比べて固形飼料は消化しやすく、消化に費やすエネルギーが少なくてすむので、が長くなる。

二 次の問いに答えなさい。

問一 次のA～Dの——線部を漢字に直したとき、「緑茶」と熟語の構成が同じになるものを一つ選び、その漢字を書きなさい。

- A じどうや生徒の健康を観察する。
- B ようもうからフェルトを作る。
- C 湿気が多くてふかいに感じる。
- D 兄と腕ずもうでしようぶをする。

問二 (1)、(2)の文から、誤って使われている漢字一字をそれぞれ書き抜き、同じ読みの正しい漢字を書きなさい。

- (1) 環境や景観に配慮した市役所の新しい庁社の建設計画が進められている。
- (2) 学校図書館で定期購読している雑誌を、係の生徒が本棚に順助よく並べる。

問三 K中学校の生徒会長の岩崎^{いわさき}さんは、校区に暮らしている高齢者のためのボランティア活動に取り組むことを、生徒会役員会議で提案しました。次は、配付した資料(A)、生徒会役員の話し合いの場面の一部(B)です。これらを読んで、(1)、(2)に答えなさい。

(A) 配付した資料

今年度の新たな取組（ボランティア活動）について

- 1 校区内にあるX町内会の一人暮らしの高齢者の様子～X町内会長の原田さん(61)の話～
 - ・足腰が弱り、以前のように家事がはかどらず、もどかしい思いをしている人がある。
 - ・一人きりで過ごす時間が長く、^{さび}寂しい思いをしている人がある。
- 2 校区内で一人暮らしをしている75歳以上の高齢者の世帯数
 - ・13世帯
- 3 ボランティア活動の候補案
 - I 夏季の草刈り、冬季の雪かき
 - II 季節の花とメッセージの手渡しプレゼント
- 4 他校のボランティア活動経験者の感想
 - ・相手の方の気持ちに寄り添って、自分から考えて行動できたので自信がついた。
 - ・相手の方に喜んでもらおうと取り組んだら、自分の方が元気をもらった。
 - ・相手の方に笑顔になってもらえて、自分の心も温かくなった。

(B) 生徒会役員の話し合いの場面の一部

(岩崎さん) 今年度の生徒会の新たな取組として、ボランティア活動を行うことを提案します。

私は、先日家庭科の「高齢者と家族・地域社会」の学習で、X町内会長の原田さんにインタビューをしました。資料の①、②を見てください。原田さんは、X町内会にいる一人暮らしの高齢者のことが気がかりだという話してくれました。現在、K中学校の校区には、一人暮らしの七十五歳以上の高齢者世帯は、十三世帯あります。私は原田さんの話を聞いて、私達の身近にはX町内会の一人暮らしの高齢者のように、困っている高齢者がいるのではないかと考えました。

皆さんは、この状況をどのように思いますか。私は、生徒会として、校区に住んでいる高齢者の方々のために、高齢者の気持ちに寄り添ったボランティア活動に取り組みたいと考えています。そこで、資料の③にあるようなボランティア活動の候補案を考えたので、意見を出してください。

〈岩崎さんの提案に対する意見交流〉

(岩崎さん) 皆さん、私の提案に対して前向きに話し合ってください、ありがとうございます。

(1) (B) の [] で囲んだ部分で、あなたが岩崎さんの考えたボランティア活動の候補案のうち、いずれかのよさについて意見を述べるとしたら、どのような意見を述べますか。次の条件1、2にしたがって、解答欄に示した表現につなげて書きなさい。

条件1 (A) の③「ボランティア活動の候補案」のうち、あなたが選んだ案の記号を、解答欄の [] に書くこと。

条件2 (A) の①「校区内にあるX町内会の一人暮らしの高齢者の様子」のいずれかに触れながら、その高齢者が望んでいることを考えて、書くこと。

(2) 岩崎さんは、話し合いの最後にボランティア活動の意義について述べて、話し合いを終えました。次は、岩崎さんの話した内容の概要です。 [] に当てはまる表現を、二十文字程度で書きなさい。

(A) の④「他校のボランティア活動経験者の感想」に共通して言えることをもとに、ボランティア活動は [] ことを訴えて、活動に積極的に取り組もうと呼びかけた。

三 三 三
次の文章を読んで、問いに答えなさい。

これは、小学校三年生の心平が、以前、捕まえようとしたが逃げられた大きな雨鱒を捕るために、学校が終わった後、一人で川へ行つたときの話です。

川には誰もいなかった。心平が一番乗りだった。空はどんよりと曇つていた。重い雲が低くたれこめ、ゆつくりと東に流れていた。遠くの山並みは厚い雲に隠れて見えなかった。風はなく、川の風景は暗く沈んでいた。川の中も暗かった。よく眼をこらして、しばらく眼がなれてくるまで水中をみていないと、よく見えなかった。それでも、眼がなれてきても、遠くまではみえにくかった。

心平はいつも増して、入念に勢い止めの中を探つた。丸太の陰と大きな石のまわりは特に慎重に探つた。そのたびに、心平は緊張し、期待に胸をときめかせた。しかし、ウグイやヤマメはいたが、雨鱒はいなかった。そうやって、丸太を組んだ升目のひとつひとつを水門の方から対岸の森の方へと移動した。ウグイやヤマメは放つておいた。いまはそんなものはほしくなかった。ウグイやヤマメを突いて音を立てるのがいやだった。音を立てて、雨鱒を刺激するのがいやだった。ウグイやヤマメは、その気になればいつだって捕ることができのだ。

ふいに、大きな魚影が心平の眼を横切つた。心平はすぐに雨鱒だとわかつた。まだ勢い止めから離れずにいたのだ。

「いた！」心平は水面から顔をあげていった。いつもの儀式だった。

心平はいそいで水中をのぞき込むと、みうしなつてなるものかと眼を見開いて雨鱒のうしろ姿を追つた。雨鱒は背中の白い斑点をゆらめかせて、大きな丸石の向こう側に消えると、すぐに一回りしてまた姿をみせた。雨鱒は、大きな石と石の間から身を乗り出すようにして静止すると、じつと心平をみた。ゆつたりと呼吸していた。背ビレと胸ビレもゆつたりと動かししていた。一点に静止するための動作だった。

ヤスを突くには遠すぎたので、心平はそつと近づぐことにした。

心平は身をかがめて近づいた。心平が近づいても、雨鱒はじつと心平をみているだけで、逃げるようなそぶりはちつともみせなかった。距離が縮まると、雨鱒の背中の斑点がはつきりとみてとれた。実にきれいだった。心平はもう一步前進した。川床の砂が少し舞いあがった。雨鱒はまだじつとして動かなかった。大きな眼が心平をみていた。心平はさらに雨鱒に近づいた。今度はヤスがとどく距離だった。しかし、もう少し近づけば万全だったので、心平はどうしようかと迷つたが、意を決して近づぐことにした。心平はそつと注意して近づいた。まだ雨鱒は逃げなかった。もう、雨鱒は手のとどきそうな距離になつていた。心平は緊張した。ゆつくりと、慎重に前進した。心平は、心臓が大きく鼓動しているのがわかつた。初めて魚を突いた時もこんな感じだったが、いま心平はそのことは忘れていた。眼の前の雨鱒のことしか頭になかつた。

心平はヤスを身体の脇わきに引き寄せると、緊張して持つ手にギョツと力を入れた。左手でしっかりと丸太をつかんで、バランスがくずれないように身体を支えた。丸太はぬるぬるしてすべつたので、心平は身体を支えるだけにした。それだけでも心強かつた。


雨鱒を突く体勢はすっかり整つた。あとは、秀二郎爺しゅうじろうぢに教えてもらった手順を素早くやつてのければよかつた。心平は、もうヤスの重さは感じていなかった。口が渴かわいて、ドキドキする心臓の、大きくて早い鼓動だけが感じられた。

心平は、雨鱒に悟られないように、注意して、そつと、ヤスの穂先を雨鱒の頭上のに持つてい

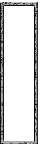
た。それでも、雨鱒は動かなかつた。心平は、もうひと呼吸、そつとヤスの穂先を近づけた。雨鱒の頭上で、切つ先の狙いがピタリと定まった。あとはいっきに突けばよかつた。すると、心平は急に手が震えた。刺激が強すぎたのだ。ヤスの穂先がブルブルと震えてしまった。その瞬間、雨鱒はあつという間に反転して、石の向こう側に消えてしまった。「はい！ 逃げられだじゃ！」心平はがっかりした。水中をのぞいたまま声に出していった。緊張がとけていった。急にヤスが手に重くなつた。その時、心平は初めて背中に水滴が落ちたのを感じた。いつの間にか雨が降ってきたのだった。雨は、まだポツリポツリと散發的だった。気温がぐつと下がり始めたのがわかつた。心平は立ちあがると、笑つてため息をついた。「はあ、ドキドキしたあ」と心平はいった。逃げられたのはがっかりしたけど、もう少しのところまで追い詰めたことがうれしかった。次の機会にはきつと仕留めることができる。希望と自信が、少年の胸にふくらんでいった。

(注) 勢い止め——川の中に丸太を組んで、川の水の勢いを弱めている場所。
 (川上健一「雨鱒の川」による)

ヤス——水中の魚を刺して捕らえる道具。
 秀二郎爺つちや——魚捕りの名人。

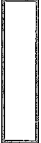
問一 ——線1「『いた！』心平は水面から顔をあげていった」とありますが、心平が雨鱒を見つけるまでの様子を、次のようにまとめるとき、に当てはまる言葉を文中から十七字で書き抜きなさい。


遠くまでは見えにくい暗い川の中で、よく眼をこらし、を探りながら、対岸の森の方へ移動し、ウグイやヤマメには目もくれず、雨鱒を探していた。

問二 ——線2「心臓が大きく鼓動しているのがわかつた」とありますが、この時までの心平と雨鱒に関する描写を、次のように整理するとき、に当てはまる表現を、文中の言葉を用いて二十字以上、二十五字以内で書きなさい。

<p>心平に関する描写</p> <p>心平は身をかがめて近づいた。 心平はもう一步前進し、川床の砂が少し舞い上がった。 心平はヤスの届く距離から、意を決してさらに近づいた。</p>	<p>雨鱒に関する描写</p> <p>雨鱒はじつと心平をみており、逃げるそぶりをみせなかつた。 雨鱒は心平の手が届く距離まで近づいても逃げなかつた。</p>
--	---

問三 ——線3「希望と自信が、少年の胸にふくらんでいった」とありますが、これは、心平が、どのような雨鱒捕りの経験をしたことにより、どのように思えたということですか。解答欄に示した表現に続けて、七十字程度で書きなさい。

問四 次は、この文章における表現上の工夫の一つをまとめたものです。に当てはまる言葉を、文中から五字で書き抜きなさい。

心平の緊張が最も高まっているときと解けたときの落差を、の感じ方の変化によって表現している。

四

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

博雅三位、月の明かりける夜、直衣にて、朱雀門の前に遊びて、よもすがら、笛を吹かれけるに、同じさまに、直衣着たる男の、笛吹きければ、「たれならむ」と思ふほどに、その笛の音、この世にたぐひなくめでたく聞えければ、あやしくて、近寄りて見ければ、いまだ見ぬ人なりけり。われもものをもいはず、かれもいふことなし。かくのごとく、月の夜ごとに、行きあひて、吹くこと、夜ごろになりぬ。

かの人の笛の音、ことにめでたかりければ、こころみに、かれを取りかへて吹きければ、世になきほどの笛なり。そののち、なほなほ月ごろになれば、行きあひて吹きけれど、「もとの笛を返し取らむ」ともいはざりければ、ながくかへてやみにけり。三位失せてのち、帝、この笛を召して、時の笛吹どもに吹かせらるれど、その音を吹きあらはす人なかりけり。

〔十訓抄〕による

(注) 博雅三位——平安中期の貴族で音楽の名人。 直衣——貴族の普段着。
よもすがら——一晩中。 たぐひなくめでたく——例がないほど素晴らしく。
なほなほ——引き続き。 ながくかへて——長い間、取り替えたままで。
失せて——亡くなつて。

問一 線ア、オのうち、博雅三位の動作を表しているものを、全て選びなさい。

問二 文中の ①、② で囲んだ部分の博雅三位と男の様子を、次のようにまとめるとき、
①、② に当てはまるものの組み合わせとして最も適当なものを、ア、イから選びなさい。

月が出ている夜に、朱雀門の前で二人は ① 笛を吹き合った。その後、二人で ② 笛を吹き合うことが。

- ア ① 待ち合わせて ② 数夜にもなった
 - イ ① 待ち合わせて ② 一夜もなかった
 - ウ ① 偶然出合い ② 数夜にもなった
 - エ ① 偶然出合い ② 一夜もなかった
- 問三 次のア、イ、ウ、エを、この文章で起きた順に並べかえなさい。
- ア 博雅三位には、男の笛の音が他に比べるものがないほど素晴らしく聞こえた。
 - イ 博雅三位と同じような素晴らしい音を出すことができる笛吹はいなかった。
 - ウ 博雅三位が、試しに男の笛を吹いてみたところ、素晴らしい笛だとわかった。
 - エ 博雅三位は、男から笛を返すように言われなかったので、その笛を長い間持っていた。

令和三年度
高等学校入学者選抜学力検査問題

第一 部

国 語

注 意

- 1 問題は、**一** から **四** まであり、7ページまで印刷してあります。
- 2 学校裁量問題は、**三** です。
- 3 答えは、すべて別紙の解答用紙に記入し、解答用紙だけ提出しなさい。
- 4 問いのうち、「……選びなさい。」と示されているものについては、問いで指示されている記号で答えなさい。
- 5 問いのうち、字数が指示されているものについては、句読点や符号も字数に含めて答えなさい。

— 次の問いに答えなさい。

問一 次のA～Dの——線部を漢字に直したとき、「緑茶」と熟語の構成が同じになるものを一つ選び、その漢字を書きなさい。

- A じどうや生徒の健康を観察する。
- B ようもうからフェルトを作る。
- C 湿気が多くてふかいに感じる。
- D 兄と腕ずもうでしょうぶをする。

問二 (1)、(2)の文から、誤って使われている漢字一字をそれぞれ書き抜き、同じ読みの正しい漢字を書きなさい。

- (1) 環境や景観に配慮した市役所の新しい庁社の建設計画が進められている。
- (2) 学校図書館で定期購読している雑誌を、係の生徒が本棚に順助よく並べる。

問三 K中学校の生徒会長の岩崎^{いわさき}さんは、校区に暮らしている高齢者のためのボランティア活動に取り組むことを、生徒会役員会議で提案^{ていせん}しました。次は、配付した資料(A)、生徒会役員の話し合いの場面の一部(B)です。これらを読んで、(1)、(2)に答えなさい。

(A) 配付した資料

今年度の新たな取組（ボランティア活動）について

- 1 校区内にあるX町内会の一人暮らしの高齢者の様子～X町内会長の原田さん(61)の話～
 - ・足腰が弱り、以前のように家事がはかどらず、もどかしい思いをしている人がある。
 - ・一人きりで過ごす時間が長く、寂^{さび}しい思いをしている人がある。
- 2 校区内で一人暮らしをしている75歳以上の高齢者の世帯数
 - ・13世帯
- 3 ボランティア活動の候補案
 - I 夏季の草刈り、冬季の雪かき
 - II 季節の花とメッセージの手渡しプレゼント
- 4 他校のボランティア活動経験者の感想
 - ・相手の方の気持ちに寄り添って、自分から考えて行動できたので自信がついた。
 - ・相手の方に喜んでもらおうと取り組んだら、自分の方が元気をもらった。
 - ・相手の方に笑顔になってもらえて、自分の心も温かくなった。

(B) 生徒会役員の話し合いの場面の一部

(岩崎さん) 今年度の生徒会の新たな取組として、ボランティア活動を行うことを提案します。

私は、先日家庭科の「高齢者と家族・地域社会」の学習で、X町内会長の原田さんにインタビューをしました。資料の①、②を見てください。原田さんは、X町内会にいる一人暮らしの高齢者のことが気がかりだという話をしてくれました。現在、K中学校の校区には、一人暮らしの七十五歳以上の高齢者世帯は、十三世帯あります。私は原田さんの話を聞いて、私達の身近にはX町内会の一人暮らしの高齢者のように、困っている高齢者がいるのではないかと考えました。

皆さんは、この状況をどのように思いますか。私は、生徒会として、校区に住んでいる高齢者の方々のために、高齢者の気持ちに寄り添ったボランティア活動に取り組みたいと考えています。そこで、資料の③にあるようなボランティア活動の候補案を考えたので、意見を出してください。

〈岩崎さんの提案に対する意見交流〉

(岩崎さん) 皆さん、私の提案に対して前向きに話し合っていたいただき、ありがとうございました。

(1) (B)の……で囲んだ部分で、あなたが岩崎さんの考えたボランティア活動の候補案のうち、いずれかのよさについて意見を述べるとしたら、どのような意見を述べますか。次の条件1、2にしたがって、解答欄に示した表現につなげて書きなさい。

条件1 (A)の③「ボランティア活動の候補案」のうち、あなたが選んだ案の記号を、解答欄の□に書くこと。

条件2 (A)の①「校区内にあるX町内会の一人暮らしの高齢者の様子」のいずれかに触れながら、その高齢者が望んでいることを考えて、書くこと。

(2) 岩崎さんは、話し合いの最後にボランティア活動の意義について述べて、話し合いを終わりました。次は、岩崎さんの話した内容の概要です。□に当てはまる表現を、二十文字程度で書きなさい。

(A)の④「他校のボランティア活動経験者の感想」に共通して言えることをもとに、ボランティア活動は□に書くこと
を訴えて、活動に積極的に取り組もうと呼びかけた。

二 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

これは、小学校三年生の心平が、以前、捕まえようとしたが逃げられた大きな雨鱒を捕るために、学校が終わった後、一人で川へ行つたときの話です。

川には誰もいなかった。心平が一番乗りだった。空はどんよりと曇っていた。重い雲が低くたれこめ、ゆつくりと東に流れていた。遠くの山並みは厚い雲に隠れて見えなかった。風はなく、川の風景は暗く沈んでいた。川の中も暗かった。よく眼をこらして、しばらく眼がなれてくるまで水中をみていないと、よく見えなかった。それでも、眼がなれてきても、遠くまでは見えにくかった。

心平はいつにも増して、入念に勢い止めの中を探った。丸太の陰と大きな石のまわりは特に慎重に探った。そのたびに、心平は緊張し、期待に胸をときめかせた。しかし、ウグイやヤマメはいたが、雨鱒はいなかった。そうやって、丸太を組んだ升目のひとつひとつを水門の方から対岸の森の方へと移動した。ウグイやヤマメは放っておいた。いまはそんなものはほしくなかった。ウグイやヤマメを突いて音を立てるのがいやだった。音を立てて、雨鱒を刺激するのがいやだった。ウグイやヤマメは、その気になればいつだって捕ることができのだ。

ふいに、大きな魚影が心平の眼を横切った。心平はすぐに雨鱒だとわかった。まだ勢い止めから離れずにいたのだ。

「いた！」心平は水面から顔をあげていった。いつもの儀式だった。

心平はいそいで水中をのぞき込むと、みうしなつてなるものと眼を見開いて雨鱒のうしろ姿を追った。雨鱒は背中白い斑点をゆらめかせて、大きな丸石の向こう側に消えると、すぐに一回りしてまた姿をみせた。雨鱒は、大きな石と石の間から身を乗り出すようにして静止すると、じっと心平をみた。ゆつたりと呼吸していた。背ビレと胸ビレもゆつたりと動かしていた。一点に静止するための動作だった。

ヤスを突くには遠すぎたので、心平はそつと近づくことにした。

心平は身をかがめて近づいた。心平が近づいても、雨鱒はじつと心平をみているだけで、逃げるようなそぶりはちつともみせなかった。距離が縮まると、雨鱒の背中の斑点がはつきりとみてとれた。実にきれいだった。心平はもう一歩前進した。川床の砂が少し舞いあがった。雨鱒はまだじつとして動かなかった。大きな眼が心平をみている。心平はさらに雨鱒に近づいた。今度はヤスがとどく距離だった。しかし、もう少し近づけば万全だったので、心平はどうしようかと迷ったが、意を決して近づくことにした。心平はそつと注意して近づいた。まだ雨鱒は逃げなかった。もう、雨鱒は手のとどきそうな距離になっていた。心平は緊張した。ゆつくりと、慎重に前進した。心平は、心臓が大きく鼓動しているのがわかった。初めて魚を突いた時もこんな感じだったが、いま心平はそのことは忘れていた。眼の前の雨鱒のことしか頭になかった。

心平はヤスを身体の脇に引き寄せると、緊張して持つ手にギュッと力を入れた。左手でしっかりと丸太をつかんで、バランスがくずれないように身体を支えた。丸太はぬるぬるしてすべったので、心平は身体を支えるだけにした。それだけでも心強かった。

雨鱒を突く体勢はすっかり整った。あとは、秀二郎爺ちやに教えてもらった手順を素早くやつてのければよかった。心平は、もうヤスの重さは感じていなかった。口が渴いて、ドキドキする心臓の、大きくて早い鼓動だけが感じられた。

心平は、雨鱒に悟られないように、注意して、そつと、ヤスの穂先を雨鱒の頭上に持つていっ

た。それでも、雨鱒は動かなかつた。心平は、もうひと呼吸、そつとヤスの穂先を近づけた。雨鱒の頭上で、切っ先の狙いがピタリと定まった。あとはいっきに突けばよかつた。

すると、心平は急に手が震えた。刺激が強すぎたのだ。ヤスの穂先がブルブルと震えてしまった。その瞬間、雨鱒はあつという間に反転して、石の向こう側に消えてしまった。

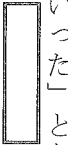
「はい！ 逃げられだじゃ！」心平はがっかりした。水中をのぞいたまま声に出していった。緊張がとけていった。急にヤスが手に重くなった。その時、心平は初めて背中に水滴が落ちたのを感じた。いつの間にか雨が降ってきたのだつた。雨は、まだポツリポツリと散發的だつた。気温がぐつと下がりはじめたのがわかつた。


心平は立ちあがると、笑つてため息をついた。

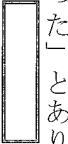
「はあ、ドキドキしたあ」と心平はいつた。

逃げられたのはがっかりしたけど、もう少しのところまで追い詰めたことがうれしかつた。次の機会にはきつと仕留めることができる。希望と自信が、少年の胸にふくらんでいった。

(注) 勢い止め——川の中に丸太を組んで、川の水の勢いを弱めている場所。
ヤス——水中の魚を刺して捕らえる道具。
秀二郎爺っちゃん——魚捕りの名人。


問一——線1「『いた！』心平は水面から顔をあげていった」とありますが、心平が雨鱒を見つけるまでの様子を、次のようにまとめるとき、に当てはまる言葉を文中から十七字で書き抜きなさい。

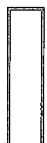
遠くまでは見えにくい暗い川の中で、よく眼をこらし、を探りながら、対岸の森の方へ移動し、ウグイやヤマメには目もくれず、雨鱒を探していた。

問二——線2「心臓が大きく鼓動しているのがわかつた」とありますが、この時までの心平と雨鱒に関する描写を、次のように整理するとき、に当てはまる表現を、文中の言葉を用いて二十字以上、二十五字以内で書きなさい。

心平に関する描写	雨鱒に関する描写
心平は身をかがめて近づいた。 心平はもう一步前進し、川床の砂が少し舞い上がった。 心平はヤスの届く距離から、意を決してさらに近づいた。	雨鱒はじつと心平をみており、逃げるそぶりをみせなかつた。 雨鱒は心平の手が届く距離まで近づいても逃げなかつた。

問三——線3「希望と自信が、少年の胸にふくらんでいった」とありますが、これは、心平が、どのような雨鱒捕りの経験をしたことにより、どのように思えたということですか。解答欄に示した表現に続けて、七十字程度で書きなさい。

問四 次は、この文章における表現上の工夫の一つをまとめたものです。に当てはまる言葉を、文中から五字で書き抜きなさい。

心平の緊張が最も高まっているときと解けたときの落差を、の感じ方の変化によって表現している。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

これは、江戸時代の絵師である伊藤若冲いとうじやくちゆうの生きた時代が、どのような時代であつたかを説明した文章です。

1 江戸時代の文化といつたとき、多くの人がまず思い浮かべるのは元禄時代（一六八八—一七〇四年）だと思えます。この時代、農村では農業生産力が増大し、都市部では地方の豊富な産物を流通させることによって経済的に豊かになっていきました。経済的に繁栄すると、文化も栄えるものです。食べていくので精一杯という状態でなくなれば、人は、生きていくためには必ずしも必要がないかもしれないようなことも楽しみ、そこにお金を使うようになるからです。

2 商売で豊かになるのは、ぶしぶしではなく商人、すなわち町人です。町人が経済力をもつようになったのに伴って、大坂や京都を中心に、井原西鶴さいかくや近松門左衛門もんざえもんらによる文芸、菱川師宣かみちのぶらの浮世絵を代表とする町人文化が大きく花開きました。

3 伊藤若冲が生まれたのは、そのような時代からすこし下った一七一六年（正徳六／享保元）、江戸時代も中期に差しかけたころのことです。

4 江戸幕府の開幕からすでに一〇〇年以上が経つたこの時代には、相反する要素が併行して進んでいました。社会全体の様子を見ると、幕府の権力構造は硬直化しはじめていた一方、町人たちの産業や文化は盛んになっています。町人たちが自分たちの階級の文化を楽しんでいたことでもわかるように、近代的な「個」の意識が生まれはじめていたということができます。

5 当時の美術状況も、そのような時代の空気を反映し、大きな二つの流れが同時に存在していました。

6 幕府に仕える画家や工芸家の仕事は、先人の型をなぞって継承することに重きをおくような、型にはまったものになっていきます。おもしろいことに、これは豊かさが町から郊外へ、さらにその先へと波及はくしつしていくこととセットになった現象でもありました。豊かな地域が広がっていくと、美術や工芸も大都市から地方都市、地方都市から農村へと階層を超えて広がっていくことになりましたが、都にいる絵や工芸の偉い先生が、日本全国の弟子たちに教えに行けるわけではありません。遠く離れた土地にいる弟子にも、都にいる弟子たちと同じように教えようとする場合、型があると、誰にでも同じような手本を示すことができ、とても効率がよいわけです。

7 表現や創造の分野において、型があること自体は、必ずしも悪いことではありません。たとえば、私たちが浮世絵を見たとき、どの時代のどの絵師の手によるものを前にしても「これは浮世絵だ」と思うことができますが、それは独自に様式化され、浮世絵ならではの共通の型をもっているからです。浮世絵に限らず、江戸時代の美術においては、根っこに共通の「型」をもちつつ、その上にさまざま個性が花開いていく——という図式が成り立っていました。

8 型と個性の関係については、歌舞伎かぶきやいけばななどの日本の伝統的な表現を思い浮かべるとわかりやすいと思います。歌舞伎にはセリフ回しやポーズなどに、何百年も伝承されてきた「型」があり、役者たちはまずそういった型を徹底的に叩き込まれます。しかし、実際に役者たちが芝居を演じているのを見ると、たとえ同じ役を演じたとしても、演じる役者それぞれによって、その人ならではの個性が醸し出されているのがわかります。同じ悪党であっても、豪快さが際立つ場合もあれば、にじみ出る愛嬌あいせうが印象に残ることもあります。その

ように、型をベースに個性を花開かせるという表現のあり方は、江戸時代には（江戸時代のみならず、東洋の技芸には比較的共通して、といえるかもしれませんが）一般的なことだったのです。

9 そのように型が発達して様式化が進んだ一方で、新しい、個性的な表現が次々と生まれてきたのも、この時代の特徴です。庶民の間に芽生えはじめた個人という意識は、表現者それぞれの個性を尊重することにもつながり、それがさらに、とくに際立った個性、つまり、もの珍しいものや新しいものに対する好奇心へと発展していきました。

10 財力を蓄えた上方や江戸の町人は、自分たちの楽しみのために美術作品を生活の中に取り込むようになりましたが、もの珍しさを追い求めたい気持ちの高まった彼らは、もはや昔ながらのありきたりな表現では満足できません。自分たちがお金を出す作品には、誰も見たことのないような斬新な表現を求めるようになりました。

11 とくに地方の豪農たちが好んだのは、脱俗の「奇」の表現でした。画家たちはこぞって新奇なモチーフや変わった表現の作品を描き、彼らの要望に応えます。この時代における美術は、階級制度に疑問を抱きはじめ、自己表現を求める人びとの心を自由に解き放つ役割を果たすものでもあった。そのようにいうことができると思います。

12 そうした時代状況を背景に、一八世紀、江戸時代中期の美術の表現はとても多様になっていきました。

(注) 脱俗——俗世間の気風から抜け出ること。

(辻惟雄「伊藤若冲」による)

問一 ——線1を漢字で書きなさい。また、——線2、3の読みを書きなさい。

問二 次は、ある生徒がこの文章から読み取った、型のよさをまとめたものです。①、②に当てはまる表現を、それぞれ五字以上、十字以内で書きなさい。ただし、

①は文中の語を使って書くこと。また、②は「ジャンル」という語を使い、文中の浮世絵の例から考えて書くこと。

先生が、どの弟子たちにも同じように教えようとする場合、誰にでも同じような手本を示して、知識や技能等を①ことができる。
ある美術作品を初めて見た人でも、特定の美術作品群との何らかの共通点を見出して、その作品の②ことができる。

問三 ——線1「型をベースに個性を花開かせる」とありますが、江戸時代には一般的であったこうした表現のあり方について、いけばなを例に次のようにまとめるとき、①に当てはまる最も適当な表現を、文中から十字以上、十五字以内で書き抜きなさい。

いけばなでは、最初に花材の選び方や花の配置などの①を身に付けるが、生けた人によって、作品に豪快さや繊細さなどが表れる。

問四 ——線2「誰も……斬新な表現」とありますが、江戸時代中期において、こうした斬新な表現はどのような役割を果たしたと筆者は述べていますか。「個人」という意識がどのような関係したのか分かるようにして、百五字程度で説明しなさい。

問五 この文章の段落と段落の関係について説明した文として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア ④の段落では、①から③の段落までの内容を受けて問題提起している。
- イ ⑥の段落では、④と⑤の段落で説明された内容と対立する内容を述べている。
- ウ ⑧の段落では、⑦の段落の要点を、具体例を用いて説明している。
- エ ⑩の段落では、⑨の段落の内容を否定した上で、主張を展開している。

四

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

博雅三位、月の明かりける夜、直衣にて、朱雀門の前に遊びて、よもすがら、笛を吹かれけるに、同じさまに、直衣着たる男の、笛吹きければ、「たれならむ」と思ふほどに、その笛の音、この世にたぐひなくめでたく聞えければ、あやしくて、近寄りて見れば、いまだ見ぬ人なりけり。われもものをいはず、かれもいふことなし。かくのごとく、月の夜ごとに、行きあひて、吹くこと、夜ごろになりぬ。

かの人の笛の音、ことにめでたかりければ、こころみに、かれを取りかへて吹きければ、世になきほどの笛なり。そののち、なほなほ月ごろになれば、行きあひて吹きけれど、「もとの笛を返し取らむ」ともいはざりければ、ながくかへてやみにけり。三位失せてのち、帝、この笛を召して、時の笛吹どもに吹かせらるれど、その音を吹きあらはす人なかりけり。

(「十訓抄」による)

(注) 博雅三位——平安中期の貴族で音楽の名人。 直衣——貴族の普段着。
 よもすがら——一晩中。 たぐひなくめでたく——例がないほど素晴らしく。
 なほなほ——引き続き。 ながくかへて——長い間、取り替えたままで。
 失せて——亡くなつて。

問一 線ア～オのうち、博雅三位の動作を表しているものを、全て選びなさい。

問二 文中の ① で囲んだ部分の博雅三位と男の様子を、次のようにまとめるとき、
 ①、② に当てはまるものの組み合わせとして最も適当なものを、ア～エから選
 びなさい。

月が出ている夜に、朱雀門の前で二人は ① 笛を吹き合った。その後、二人で
 笛を吹き合うことが ② 。

- ア ① 待ち合わせて ② 数夜にもなった
 イ ① 待ち合わせて ② 一夜もなかった
 ウ ① 偶然出会い ② 数夜にもなった
 エ ① 偶然出会い ② 一夜もなかった
- 問三 次のア～エを、この文章で起きた順に並べかえなさい。
- ア 博雅三位には、男の笛の音が他に比べるものがないほど素晴らしく聞こえた。
 イ 博雅三位と同一ような素晴らしい音を出すことができる笛吹はいなかった。
 ウ 博雅三位が、試しに男の笛を吹いてみたところ、素晴らしい笛だとわかった。
 エ 博雅三位は、男から笛を返すように言われなかったので、その笛を長い間持っていた。